

土佐のわらべ

第422号《第444回（2017. 1. 12） 子どもの本の読書会記録》参加者5人・文書参加3人

『小倉百人一首』 田辺 聖子/著 ポプラ社（ポプラポケット文庫）

新年第一回目の読書会は、田辺聖子さんの『小倉百人一首』でした。

ちょうどこの本を読む時期がお正月ということもあって、子どもの頃に家族と遊んでいた札を取り出して、眺めてみました。和歌に秘められた深い意味はよく分からなくても、そのまま覚えて、札をとっていた頃を懐かしく思い出しました。

さてこの本には、語り手の他に元気な二人の案内人がいます。中学一年生のお姉ちゃん「サダ子さん」と小学六年生の男の子「イエ太くん」です。百人一首をえらんだ藤原定家にちなんで名づけられているのです。

二人の軽妙な語り口とともに、和歌の背景や文法、かるたの遊び方ばかりでなく、『源氏物語』や『今昔物語』等の古典文学の世界や、落語等の日本文化にまで話は広がっていきます。二人に導かれて、知らず知らずのうちに、一つ一つの和歌が持つ広い世界に導かれていくのです。

「まるで平安版のビブリオバトルを見ているみたい」といった声もあがりました。そんな繋がりがこの和歌にあったのか、ならばこの古典文学も読んでみなければ、と思わせられる場面も多々あったのでした。

それではここで、読書会で語られた感想をご紹介します。

・「今に通じる」と、「千年も昔」の両方楽しめた。和歌だけでなく背景も書いてありイメージしやすかった。和歌を詠んだだけでなく、それが今まで残っていることに、代々伝えてきた人の気持ちが伝わる。楽しみで文学が残ってきたのが好き。好きな和歌は55番。

・定家の守備範囲は広い。それぞれの和歌がウィットに富んでいる。また、言葉の使い方に凝った選歌をしている。気になった和歌は15番、77番、17番、9番、35番。

・和歌は声にだす音読が大切だと思った。この本を読むことで、お正月が漫然と過ぎなかった。

・土地と文学は切り離せないと思った。土地の様子を知っているの、今と昔を行ったり来たりして楽しんだ。

・旅行記としても面白い。百人一首を辿る旅をやってみたら良いかも。

・人は儂い。自分の事を覚えている人もやがていなくなる。まして、昔々に生きた人のことなど、知りようもない。でも、こうして歌は残り、その時のその人の思いだけは残って今に伝わっている。確かにそこにその人は存在していたのだと感じられる。平凡な自分は、やがて消えてしまうけれど…。好きな歌は5番、7番、77番。

・古い歌なんて馴染みがないように思えたが、思い返すと、案外百人一首が身近にあった。今回読んでみて、楽しめたのは歌との再会といった感じで、この歌知ってる！を楽しんだ。気に入ったのは5番。

・技巧を凝らした恋の歌よりも、単純に景色を詠んだ歌のほうが、映像が目につかび、想像力を働かせることができるので好き。好きな歌は2番。

百首もあると、印象に残ったり好きだったりする和歌は人それぞれ。この本を読みながら、自分のお気に入りを見つけてみませんか。ちなみに私の好きな和歌は33番と87番です。四季のある日本は本当に美しいと思います。

(N. T)